慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国神話研究の動向と三論文の位置づけ
Sub Title	A short history of the study of Chinese mythology
Author	伊藤, 清司(Itoh, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.4 (1997. 7) ,p.109(585)- 118(594)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム中国神話学の現在
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970700-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国神話研究の動向と三論文の位置づけ

伊藤清司

中国の古代神話はその体系も全体像も確めようがない。漢族が世界最多の浩瀚な古い記録を遺していながら、神話そのものを伝える書物となるとまことに寥々たるものだからである。こうした現実は『古事記』、『日本書紀』などによって、すぐれた体系神話、それも複数のそれをもち伝えてきたわれわれにとっては、意外というべきであろう。

こうした実状はもちろん、中国がもともと神話の不毛な国であったからでも、漢族が神話に無縁な民族であったからでもない。また、かつて存在していた神話関係の記録が、王朝の度重なる交替や戦乱などによって、湮没したり、散佚したりしてしまったからでもないであろう。そのおもな理由は文筆に専ら携わっていた古代の知識人の神話伝説に対する姿勢にあった。著述行為が活発になった春秋から戦国の時代にかけて、中国世界は対立抗争の真っ只中にあり、諸子百家と総称される知識人たちの多くは当時、有能なテクノクラートであった。彼らは独自の主義主張に添って神話伝説を治政の質とすべく、その部分々々を切りとって現実的、功利的に解釈していった。それは恰も詩（経）の断章取義の態度に通じるものがあったが、その結果、神話上の主人公たちは不幸なことに各自学派に都合のよい古帝王などに改造され（その所産が人頭蛇身の伏羲や牛頭人身の神農など、異形の帝王像）、あるいは神話そのものが歴史の鑑や寓話に脚色されてしまった。

それらイデオローグたちの中で、超自然的存在をもっとも忌避したのは儒家集団であったが、やがて統一国家が生まれ、安定した漢王朝の成立した以降は、この合理

主義学派が永く中国学術思想界に君臨した。このことは中国神話にとって第二の不幸であり、そのことによって体系神話を辛うじて再構成することのできる最後の機会を逸することになったばかりでなく、やがて流行した讖緯説などによって神話はさらに変色を余儀なくされた。

その後、インド伝来の仏教思想やその刺激によって形成された道教などの影響をうけ、六朝時代以降、一部の知識階級の間に超自然的世界に対する関心がたかまり、いわゆる志怪小説ブームがおこったが、それによって古代神話が復権するにはほど遠いものがあり、その後は志怪は志人文学、伝奇文学へと風趣が変わり、神話そのものが知識人の視界の外へ遠退いていったのである。（このような経緯については、拙著『中国の神話・伝説』（一九九六年、東方書店）の「はじめに――中国の神話・伝説の特色」を参照されたい）

古代神話が歴史や寓話に衣換えを余儀なくされ、あるいは志怪文学に融解されたといっても、とにかく、その遺残なり面影なりが古文献の中に留められていたことは僥倖というべきであろうか。限られた資料とはいえ、これらの存在によって、神話研究が黎明期を迎えることができたのである。

中国の神話研究は白話運動と連動し、それに雁行しながらスタートした。胡適、茅盾、顧頡剛らによって、古文献に埋没しかかっている古代神話の掘り起こしとその復原作業が始められた。しかしながら、内外の国情不穏の中で、その成果は寥々たるものであった。やがて国共抗争を経て、強力な統一政権が誕生し、政治の安定期を迎えた。しかし、然るべき成果がなかったわけではないが、社会主義政権の下で神話学は約三十年間「冷門（冷遇された学問分野）」に置かれていた。

神話研究が本格的に展開したのは文化大革命が終熄してからである。その第一の貢献者は神話の「界説」（定義）論の仕掛人・袁珂氏である。彼は神話の広義説を提起し、狭義説支持者たちに論戦を挑んだ。マルクス主義に固執するそれまでの神話観では、神話は原始氏族社会という限定された歴史の一発展段階の所産であって、当該社会の瓦解に伴って消滅する文化現象であると認識されていた。そのような限定された神話が「狭義の神話」であるが、この種の神話が古文献の中に換骨奪胎されて辛うじて伝えられているに過ぎないから、それを対象としたこれまでの中国におけるマルクス主義的神話研究はきわめて窮屈で特異な学問であった。袁珂氏は神話の範

囲を拡大し、歴史化した神話、伝説、仙話（神仙説話）、さらに怪異譚や童話（昔話）の一部をも神話のカテゴリーに入れることが可能であると主張した。彼のこの広義説は単なる神話の定義論に留まるものではなかった。それは、当時の反右派闘争の動きと深く関連して激しい路線論争となって沸騰し、賛否の論戦が続いた。この動きを承けて、学界は神話界説討論会（一九八四年）を開催し、翌年には社会科学院が全国神話理論検討会を主催して、神話の起源や本質、神話的思惟、新しい神話、神話の研究法など広範にわたる討論が闘わされた。（その主要な成果は劉魁立、馬昌儀、程蕾共編『神話新論』《一九八七年、上海文芸出版社》にまとめられた）。

こうして中国の神話研究は新しい段階に入った。袁珂氏の問題提起に端を発した神話の定義論争は鄧小平の改革・開放路線の進展に伴って、広義説の優勢裡に推移し、それまでの古典中心の研究対象が拡大したこともあって、学界はにわかに活況を呈し、尨大な著書や論文が続出して今日に至っている。（解放後、八十年代後半までの約四十年間における中国神話学界の具体的な動向については鈴木健之氏の二つの論文、「中国における最近の神話研究について」《早稲田古代史研究会『古代研究』第十九号》と「近年中国における神話研究の新たな動向――個別研究を中心に――」《早稲田大学中国文学会『中国文学研究』第十三期。ともに一九八七年刊》によられたい。）

現今の中国における神話研究は袁珂氏が会長を務める中国神話学会と中国民間文芸研究会主宰の理論誌『民間文学論壇』（八二年創刊、季刊ののち隔月刊）などを中心に発展しているが、全国各地の研究機関が刊行する各種の出版物にも神話関係の論文が数多く掲載されており、他方、単著、編著の論文集も踵を接して刊行されていて、その数は枚挙に遑もないほどである。

このような盛況をみるに至ったのは上述したこと以外にもいくつかの背景があった。その一つは少数民族の神話研究の発展である。中国神話研究にこの新しい地平を拓いたのは聞一多である。彼は日中戦争の最中、湖南省長沙から雲南省昆明への「小長征」の途中、華南少数民族の神話伝説に接したのが契機となり、苗族、瑤族などが伝承する神話と古典神話との比較研究に着手したが、彼は不幸にして国共抗争の犠牲となり、その斬新な研究は断絶してしまった。しかし、新しく樹立された北京政府の少数民族政策のもとで、辺疆各地区に住む諸民族調

査の一環として「生きている神話」が多量に採集され、その尨大な資料と研究の成果が蓄積され、その一部がやがて国外にも公刊されるようになった。それらの中には、古代のイデオローグたちによって改竄された古典神話の復原作業と再解釈の研究に希望をもたらすものがあるばかりでなく、わが国を含め、神話の国際的な比較研究に資するものが尠くない。因みに、漢族と少数民族との長期に亘る政治的、文化的な関係からすれば、伝承する神話にも当然、活発な影響関係があったわけであるが、これまでの中国における両者の比較研究の中には、摘出された文化的共通点がややもすれば民族的共通点と混同視され、短絡して一気に種族同祖説に飛躍するものもないわけではない。

古典神話の研究に光を照射するものの一つにめざましい考古学上の成果がある。いわゆる解放後発掘されたおびただしい考古学的資料の中に古代神話を視覚的（ビジアル）に描き出した出土物が含まれている。湖南省長沙馬王堆漢墓出土の彩色帛画はそのもっとも代表的な例であるが、とくに指摘したいことは、古代の為政者階級を埋葬した墳墓の壁画などに、たてまえ上は語ることを憚ったはずの「怪力乱神」の姿がおうおうにして見られることである。考古学的資料には、神話学の補助資料としておのずから限界はあるものの、従来、古文献のみによっては窺え知ることのできなかった古典神話の隠れた部分が、出土物によって明らかにされる可能性がでてきた。

最近、中国神話研究に大きな期待を与えているのが漢族の民間からつぎつぎに発見されている新資料である。漢族社会では神話は遠の昔に消滅したと思われていた。それがところもところ、黄流中下流域の中原地方などの漢族の村々に、神話が現に伝承されていることが明かになった。それらの中でもっとも神話学界に大きな反響を呼んだものの一つが、谷野氏がとりあげている湖北省巫山地区の『漢族長篇創世史詩神農架黒暗伝』（一九八六年）である。もう一つは『中原神話専題資料』（一九八七年）で、これは河南省の各地から採集された盤古、伏羲、女媧などの神話約二三〇篇を編んだ資料集である（両書はともにいわゆる内部出版物）。このほか、古典神話の中の防風氏とは異質の防風神に関する神話伝説約三〇篇が浙江省の湖州、紹興地区などの民間に伝承されていることが明かになり、それら資料が『民間文学』誌上その他に報告されている。数量の多寡はあるが、今後も中国各地の漢族社会から同じように神話資料の採集され

る可能性がある。現に地方の刊行物に当該地方で採集された古典神話の系統に属する神話伝説が掲載されることが珍しくなくなった。中にはたとえば、侯光、何祥録氏編輯の『四川神話選』（一九九二年、四川民族出版社）や甘粛省の成紀、現在の静寧県地方伝承の盤古、伏羲、女媧などの神話を編んだ『成紀神話』（一九九六年？、内部出版物）などのような神話資料集も出ている。ただし、資料的価値としては相変らずバラつきが目立つ。それらの中で前者は収録した一三三篇すべてに採集地点、話者名（職業を含む）、採集整理者名などが明記され、部分的ながら注や解説もあって、学術資料としての体裁がよく整っている。

なお、上記の湖南省巫山神農架から一九九〇年六月に『黒暗伝』とは別の神話資料が発見されたという。『文摘報』（九一年三月十四日付）によれば、それは一七二頁、約二万字に達する『太陽経』、『太陰経』、『太陽太陰経』の木刻本で、書名が語るとおり、内容は日・月神を中心とする民間伝承であると伝えられる。因みに、扉には同治十一年（一八七二）の刻文が認められるという。印刷刊行の有無を含め委細は今のところ不明である。

ひところ激しかった神話の界説論争も漸く沈静に向かい、やたらマルクス理論を振りかざす硬直した研究もしだいに姿が薄くなり、開放路線の只中で、これまでは全く見られなかった自由な研究が目立つようになり、発表される論文の数も堰を切ったように激増しつつある。尤も数ある論稿の中には些か奔放で勝手過ぎるのではと思われる作品もないわけではないが、一九五六年に中国共産党が打ち出した「百花斉放、百家争鳴」のキャンペーンが神話学会でも今漸く具現しつつあるの感がつよい。こうした動きの中で注目されるいくつかの著作が挙げられるが、その一つが馬昌儀編『中国神話学文論選萃』（一九九四年、中国広播電視出版社）である。これは白話運動期以降、現在に至るまでの中国神話学界のあゆみを回顧し、その間に公けにされた主要な論文一〇〇篇を精選して、総頁数一六六〇頁、上・下二冊に編輯したものである。これに収録された論文は古典神話に留まらず、各少数民族の神話を対象にしたもの、理論を述べたもの、宗教、仙話、史詩、民間故事（伝説昔話）、童話などとの関係を扱ったものなど広範多岐に亘っている。なお、下巻末に一九〇二年から四九年までの大陸の神話研究者の論文目録（約三六〇篇）および主として台湾、その他海外で活躍した中国人学者の論文目録（約四〇〇点）を

附録として掲載している。中国神話研究史の大網を知るに最も至便な編著である。

以上に略述した中国神話研究の動向の中で、金、谷野、森の三氏の論文はそれぞれ独特な位置を占めるすぐれた研究[註]といえるだろう。まず、金氏の論文についていえば、従来、欠落し乃至は手薄であった新しい視点に立った画期的研究である。「生きている神話」を伝承している少数民族の神話（これも中国神話の一部である）については、それぞれの歴史、社会、信仰、儀礼などとの関連を問題にして、その伝承の担い手に及ぶ研究も少なくはないが、こと古典神話に関しては金氏の指摘のとおり、殆ど欠落しているといってよい。わずかに徐旭生が『中国古史的伝説時代』（一九六〇年）で古代神話に活躍する神々の伝承を分類し、その担い手を華夏、東夷、苗蛮の三つの集団のいずれかに想定したり、最近になって『民間文学論壇』などに個別神話のそれぞれの担い手に言及した論文も発表されるようになったが、その多くはトーテミズムに立脚した抽象的、観念的な研究である。その点、金氏論文は敦煌変文によって南陽出身の帰義軍節度張氏を具体的な担い手とする建国神話の再構築を企画したもので、その試みはみごとに成功している。

金氏論文の特色の一つは資料的に豊富な中世、近世の説唱文学類に神話学の光を当てた点にある。こうした試みはわが国で福田晃氏が中世神話というカテゴリーを設けて中世縁起物類の神話学的研究を進められているのに比較できるだろう。なお、大林太良氏は近世以来の中国地誌類や地方に散見する民間伝説の中から変容した中国古代神話の掘り起こしを模索されている。上述したとおり、袁珂氏の提唱する「広義の神話」説は中世、近世の民間伝承も神話研究の対象たり得ること、つまり、神話は必ずしも古代の限定されたある状況においてのみ存在すべきものでないことを強調したものである。しかし、こうした「広義の神話」説は具体的には主として古典神話の復原作業の一翼を担う域を遠く出るものではなかった。そういえば、敦煌変文を活用した拙論「堯舜禅譲伝説的眞象」（王孝廉、呉継文編『神與神話』《聯経出版事業公司、一九八九年》）もこのような従来の研究法の延長上にあるものの一つである。それはそれとして、一見何ら関係のないかに見える敦煌変文「前漢劉家太子伝」の五つの説話を一つの連環につなげて、前漢金山国の建国神話を再構成した金氏の炯眼とその手法はみごととい

うほかない。

しかし、何といっても金氏の功績は中国神話学に新しいジャンルをきり拓いた点にある。資料的に貧困な古典神話の断片の復原作業に終始してきた従来の中国の神話学は豊饒な中国学の中での神話研究ではなくて、西洋モデルに依拠した神話学の中の一領域としての中国のそれであったこと、中国にはもともと神話が乏しかったのではなく、中国の神話は歴史的諸条件の中で大きく変貌しているので、中国神話学が今後めざすべき一つの道は「神話の存在の証明ではなく欠如の証明が、復原ではなく変容の過程の探究」にあることを指摘した金氏の論文は新しい中国神話学の進むべき一つの道標といえるであろう。あとでその一、二について言及するが、こうした提言に共鳴するかのように、最近、中国でも古代神話の変容過程の模索が進められつつある。

金氏の論文が中世、近世の説唱文学類によって中国の神話研究に新しい地平を拓いたものであるというならば、谷野氏のそれは最近まで漢族が伝承してきた神話の研究という新しい領域の設定に先鞭をつける論文といえるだろう。この『黒暗伝』をめぐる論文で谷野氏が提起している問題点はつぎの二つに要約できる。その第一点は神農架の創世神話のもっとも特徴的なモチーフ、浪蕩子が天地根源の物質を盗む話と古典中の鯀禹の治水神話の中の鯀が息壌を盗むモチーフとの対応の指摘である。天帝の管理下にある息壌については、顧頡剛が「息壌考」（一九五七）で問題にして以来、いまだに納得のいく解明のないまま推移してきた憾みがあるが、浪蕩子のモチーフとの相互照射によって、その意味が鮮明になってきたばかりか、鯀禹の治水神話のプロトタイプの想定、さらには中国古代神話の体系の復原への手がかりすら与えかねないものがある。

第二点は漢族の伏羲・女媧の神話と華南の少数民族が伝承する洪水型兄妹婚人類起源神話との関係に一歩踏み込んだ発言をされていることである。ご承知のとおり、両者の関係については聞一多以来相反する解釈がある。華南少数民族の神話が漢族に摂り入れられたとみる解釈と、逆に漢族の伏羲と女媧の神話が、中原文化の周辺地域への伝播に伴って華南の非漢民族に伝播し、変容されて流行したという見解であるが、谷野氏は「女媧伏羲神話系統考」（『東方学』五九輯、一九八〇年）以来の自説を、『黒暗伝』によって更に推し進められ、前者の説を

確かなものにすることに努められている。かつて長江の中・下流域で活躍していた非漢民族の先祖たちが、漢族の膨張と圧迫によって同化と移住を余儀なくされてきた歴史的事実を考えると、その昔、荆楚の地に暮していた非漢民族の神話が湖北や河南の漢族社会に受容された可能性がなかったとはいえないだろう。因みにいえば、両者の接触によってその逆の現象の生じる可能性も考えられるが、ことこの問題に関する限り、洪水型兄妹婚神話が北方や西方地域の非漢民族社会に比較して、華南の少数民族の間に圧倒的に多いというその分布状況から推論すれば、現況ではやはり前者説が有力であるといわなければならない。

谷野氏はつとに神話研究における考古学的資料の重要性に注目されてきた。本論文では本来、同胞婚モチーフとは無縁であった漢族の伏羲と女媧の二つの神話が結合して新しい神話に再生産された時期にまで踏み込み、その時代を漢代と想定された。その根拠を伏羲と女媧に随伴する玄武像の認められる画像石や画像磚に求められ、その考古学資料によって、神話変容の動態を明らかにすることを試みられている。ただし望蜀の慾をいうならば、両神の結婚を仲介した亀と玄武の関係を明白にしてほしかった。「亀が兄妹二人に結婚を勧めるという話はほかにも類例があるが、これまでそれが玄武であったと説く事例が見つかっていない」とされたうえ、「この（漢）時代に、玄武が伏羲と女媧の結婚の仲立ちをしたという形式の兄妹婚型洪水神話が漢族の間に伝えられた」と説かれているが、それは玄武（亀と蛇）を媒介者とする神話が華南少数民族から漢族に伝えられたことを意味するのか、あるいは亀を仲立ちとする華南の兄妹婚神話が漢族に摂り入れられ、その亀が玄武に変わったということなのか、それとも、漢族に伝播したのち、亀が結婚の仲介者として登場し、それが更に玄武に変化したという意味なのであろうか。この点について将来、具体的な資料によって詳論されることを期待する。因みに、華南にもこの型の神話に結婚の仲介として亀の登場する説話がある。一例をあげるならば、広西壮族自治区の瑤族の伝える洪水型兄妹婚人類起源神話がそれである。ただし、玄武が媒介をする事例は寡聞にして私は知らない。

谷野氏の『黒暗伝』解説にもあるとおり、これらの神話伝承は労働歌や挽歌として最近まで実生活の中で歌われていたものらしく、伝承の具体的な担い手も、物語られる場もあったことが想像できる一種の「生きた神話」

であった。また、『黒暗伝』の存在によって古典に残る神話が古代人の伝承した唯一の体系神話の断片であったのではなく、古代に存在していたさまざまな体系神話の中の断片であった可能性をも示唆している。そして『黒暗伝』は新たに発見されつつある漢族伝承の神話とともに、中国神話の研究に新しい展開をもたらすことを期待させる。

総じていえば、欧米では別として、中国神話研究は最近まで国際的比較の視点に立つもの、とくにその源流を中国以外の他の地域に求める比較研究ははなはだ少なかった。それは中国の歴史が東アジアで卓絶して古く、かつ、すぐれて高い文化をもって、周辺世界に大きな影響を与えてきたこと、他方、神話研究の開始以来、とくにいわゆる解放後長い間、中国が国際的に閉塞的状況のまま推移してきたことが背景にあったと考えられる。このような研究の動きをよそに、森氏は中国古代神話の起源を敢えてオリエントなどの西方世界に探る試みを精力的に続けられてきた。本論文もその一環をなすものである。

同氏はマルドゥクなどの神話の中国伝来の時期を春秋戦国時代の前後と想定して黄帝神話の成立を論じているが、この時期、中国世界に形而上・形而下の両面にわたって西方文化の影響がにわかに目立つようになったと考えられている。事実、この時代になって、西方文物に類似した文化事象が顕著に認められるようになった。これを説話について例示すれば、西周王朝の没落を語る幽王と褒姒の話（『呂氏春秋』疑似篇など）や楚の厲王の逸話（『韓非子』外儲説左下）は『イソップ寓話』の「狼と羊飼少年」と同趣旨の物語である。このような古代の東西両神話伝承の類似について、わが国では土居光知らによって早くから指摘されているが、その類似を単なる類似以上の確かな歴史的関係にあるとするための立証が比較研究のつぎの課題であった。わが国の比較神話学者が記紀神話とオリエントや古代ギリシアの神話との比較研究において腐心してきた課題もこの点にあった。遙かに古い歴史をもつ中国の古代神話と西方のそれとの比較研究についていえば、もっとも大きな障碍は両古代神話に対応する古代伝承をその中間地域に探索することが現在ではきわめて困難であることであろう。この難問を克服する方法、つまり遠く離れている類似が伝播によって生じたことを模索する一つの方法として、古典に

散見する限られた断片資料の復原パズルと併行して、金氏論文、とくに谷野氏論文が示唆しているように、中世以降の豊富な資料を活用する方法が残されているように思われる。

　縷説したように、古代神話の系譜をひく伝承が文献上にあるいは口誦の形で、近年、民間から続々と発掘され、このような新資料による古代神話の研究が中国でも盛んに進められつつある。楊利慧氏の著述『女媧的神話及其信仰』（一九九四年、未公刊）および『関于女媧信仰起源地的再推測』（一九九六年、未公刊）もその一つである。この著作で楊氏は東北三省から広東省に至るほとんど中国全土にわたって分布している百数十話の関係伝承（ただし、新疆、蒙古、西蔵の各自治区には欠く）をもって女媧神話の変遷過程を問題にしている。黄帝神話のプロトタイプが一つのまとまった神話として伝来したことが想定できるとするならば、その神話も女媧伝承と同様に、中世以降も何らかの形で遺残した可能性がある。現に黄帝関係の民間伝承の採集例は少なくない。たとえば『中原神話専題資料』に四十ページ余に亘って関係資料が採録されている。張振犁氏の「黄帝神話的伝説和歴史化」（同著『中原神話流変論考』《一九九一年、上海文芸出版社》所収）はこれらの新獲資料によった論文である。地方誌を含め中世以降の諸記録とともに、このような新たに採集される民間伝承の中に西方伝来のマルドゥク神話の痕跡を探り出すことができるかも知れない。そしてそれによって森氏の論拠がより補強されることになるだろう。このような試みは黄帝神話に限ったことではなく、東西神話の比較研究に新しい活路を見出す一つの有力な方法ともなり得るのではなかろうか。

　ことは比較研究に限らない。これまで予想しなかった漢族伝承の神話資料の続出は、それまでややもすれば閉塞気味に推移してきた中国の神話研究に広い視野と明るい展開をもたらす希望を与えてくれるだろう。

註　一九九六年六月二十九日　三田史学会大会シンポジウム「中国神話学の現在」における発表

金　文京「中国民間文学と神話伝説研究――敦煌本『前漢劉家太子伝（変）』を例として――」

谷野典之「湖北省神農架の漢族の創世神話――『黒暗伝』考」

森　雅子「黄帝伝説異聞」